

名古屋柳城短期大学

2018年度 第二回 信州リトリート 報告書



協力:特定医療法人 新生病院、ナーシングホーム須坂
新生礼拝堂、日本聖公会中部教区センター

目次

巻頭言 第2回信州リトリートについて	1
2018年度 信州リトリート 活動概要	3
写真で綴る 2018年度信州リトリート	4
参加者の感想	
参加学生のことば(1)	
—保育科・保育専攻—	9
参加学生のことば(2)	
—介護福祉専攻—	24

種時き

柳城学園 創設者
マーガレット・ヤング

翼ひろげた天使が
愛と心理と光明との
種子をひと粒手に持って
飛ぶのを止めて考えた。
「これが大きくなったなら、
すばらしい実がなるように、
どこへ蒔いたらよいだろう」
救い主さま、それを聞いて、
にっこりわらっておっしゃった。
「私のために その種子を
子どもの心に蒔いておくれ」

第2回 信州リトリートの目的と概要

名古屋柳城短期大学キリスト教センター
センター長 村田康常

2018年8月26日から28日までの3日間、名古屋柳城短期大学の学生22名と教員5名は長野県小布施町の新生病院を拠点にしたリトリートの活動を行いました。「リトリート」は「修養会」とも訳され、自分を縛っているさまざまなしがらみから離れるという意味での「避難」や「逃避」といった含意もある言葉です。保育や高齢者介護を学ぶ学生たちが、短期大学での多忙なスケジュールがつまんだ毎日からしばらく離れて、日常生活の場とは違った環境に身をおき、そこで出会った他者との関わりや周囲の世界のさまざまな出来事のなかで自分自身を見つめなおす時間をもつことが、このリトリートの趣旨です。

信州リトリートは、名古屋柳城短期大学キリスト教センターが主催する学生主体のボランティア活動として、昨年度(2017年8月)に「第1回新生病院リトリート」として始められ、今年度(2018年8月)は2回目の活動となりました。今年度は、前年の活動のなかで開かれた関わりや継続と発展、そして新しい関わりや始まりがあった年となりました。新生病院と新生礼拝堂という場所も、8月下旬という時期も、2泊3日という活動期間も前年とほぼ同じですが、参加人数が倍増して、訪問先も多様なものになりました。今年度は、昨年訪問したデイケアやサービス付き高齢者向け住宅だけでなく、緩和ケア病棟や病院に付設された保育園、地域に密着した複合型の介護施設も訪れて、子どもから高齢者までさまざまな方々との出会いと交わりの時間をもつことができました。往路では安曇野ちひろ美術館も訪れて、いわさきちひろ生誕100周年の企画展などを通してちひろさんの子どもへのまなざしと平和への願いのこめられた原画や作品に触れる機会ももちました。

2回目のリトリート活動のためか、参加した学生たちも「リトリート」の意味をよく理解して、現地で出会う方々との濃やかな交流のなかで自分自身を開いていきました。この交流のために、出発日の直前まで夏季休業中の短大キャンパスに毎日のように集まって、自分たちで企画を作り協力しながら自主的に準備を重ねてきました。また信州では、出会う方々との触れ合いの時間を一瞬一瞬に刻むような深い交わりを一人ひとりがもったように感じます。参加学生たちが経験したこの深い交わりは、この報告書の中に学生自身の言葉で綴られています。この3日間は、出会った方々と学生たちの交わりが事前の予想や不安を越えて深まり、その交わりの中心に微笑みを浮かべた主がいらっしゃるようにすら感じられる、そんな時間となりました。

今年のリトリート活動の特徴の1つは、介護福祉専攻で学ぶ10名の学生全員が「介護課程2(総合演習)」の授業の一環として参加したという点です。特に、小布施複合型介護施設と新生病院の緩和ケア病棟での活動は、介護の理論と技術とケア・マインドを学んできた学生たちにとって、またとない実践学習の機会となりました。

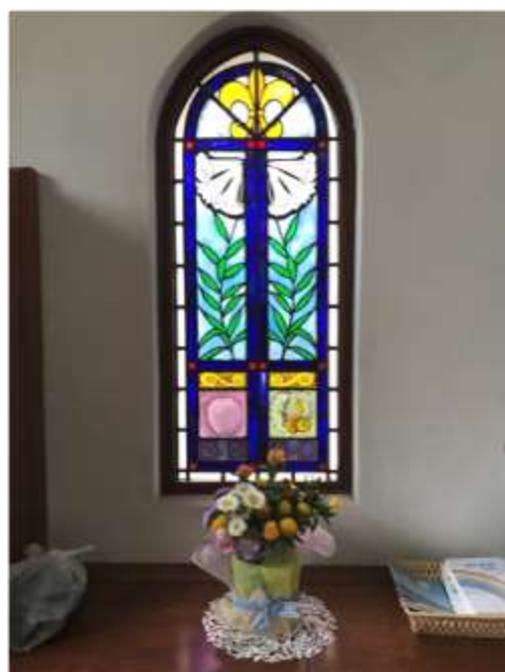
また、保育科の学生とともに保育専攻の学生たちも、昨年度に続いてリーダー役として参加してくれました。先輩を手本にし、先輩と共に活動することを通して、また後輩に教え、相談にのったり見守ったりすることを通して、学生たちのあいだで教員から教わることは別の学びが重ねられている様子を目の当たりにしました。2年課程の短大では、このように先輩と後輩が関わる機会には特に貴重です。こうして、保育科、保育専攻、介護福祉専攻という、本学を構成するすべてのディヴィジョンのすべての学年からの参加があって、学生たちのあいだにも豊かな交わりが開かれていきました。学年や学科は違っても、彼女たちは普段から毎週の礼拝や東日本大震災の被災者支援ボランティアの活動などを通して互いに知り合っていました。このリトリートの準備活動を通じて、その交流はさらに親密になり、その後の学内でのボランティア活動などにもこの交わりが継続しています。

名古屋柳城短期大学は、変革期にあります。平成時代の最後の夏の活動となったこのリトリートは、また、次年度の学生募集を停止した介護福祉専攻にとっても最後の夏期学外研修となり、したがって介護福祉専攻と保育専攻と保育科が一堂に会してのボランティア活動も、これが最後となりました。児童の保

育(child care)も、高齢者の介護(elder care)も、ともにケア(care)の営みです。保育を学ぶ学生も介護を学ぶ学生も、このリトリートの活動の1つ1つを通して、ケアを学ぶ者にふさわしい仕方で見つめなおしていました。彼女たちは自分のうちに閉じこもって自分を見つめるのではなく、出会った方々と共に過ごし、その言葉に耳を傾け、歌やハンドマッサージを通して心の交流をもつことを通して、他者との関わりの中で誠実に精いっぱいの応答と語りかけをするという仕方、自分を見つめなおしていました。目の前にいる人の手をとって直接触れ合い、マイクもスピーカーも通さない自分自身の声で語り合い、その方のこれまでの人生を思い描きながらお話を聴くという体験は、人との交わりの中で互いが互いに自分自身を取り戻し、互いに相手がそこにいてくれることを喜びあうという貴重な体験になったと思います。パソコンやスマホが普及して電子機器を介して人と人とが簡単に繋がり合うことができるようになった SNS時代の現代社会において、生身で人と関わり傾聴するという体験は、学生たちのあいだに大切なものを育んでいったと感じています。

この貴重な機会は、たくさんの方々に支えられて実現しました。東日本大震災の被災者支援のときから援助してくださっている「メリット基金」には、今年も多大な支援をいただきました。変わらないご理解を心より感謝いたします。また、新生病院チャプレンの大和孝明先生には、小布施町での3日間の活動とその準備のための数か月の献身的なお働きを通して、このリトリートを実現するための実質的な仕事の大半を担っていただきました。今年(2018年)の3月まで本学のすぐ隣にある日本聖公会中部教区センターにいらっしやって、礼拝や学校行事でも温かい笑顔を見せてくださっていた大和先生は、まさに柳城と新生病院とをつなぐ架け橋となって学生たちを迎えてくださいました。また、学生たちが何よりも喜んだのは、このリトリートがはじまった昨年度一緒にゼロから企画を立ち上げてくださった日本聖公会中部教区の金善姫司祭と、新生礼拝堂・スタートハウスで再会できたことでした。金先生は、今年もたくさんの笑顔を私たちから引き出しながらおいしい料理と温かい交わりの時間を与えてくださいました。

この活動のための場所と時間と心づくしのもてなしを用意してくださった長野県上高井郡小布施町の新生病院のみなさま、ことに、介護福祉専攻の学生たちに新生病院の歴史とホスピス、スピリチュアル・ケアについてレクチャーをしてくださった徳竹秀子さん、新生礼拝堂の信徒のみなさま、小布施複合型介護施設「さくらの園」ならびに「やまびこの家」のみなさま、ミス・パウル保育園の先生方と子どもたち、須坂市のナーシングホーム須坂のみなさまに、言葉に尽くせない感謝の念を抱いております。みなさまとの出会いの1つ1つが、私たちの大きな喜びとなり財産となっています。ありがとうございました。主がみなさまとともにありますように。



2018年度 第二回信州リトリート 活動スケジュール

期間 2018年8月26日～28日(2泊3日)

参加者 名古屋柳城短期大学の学生 22名 引率教員 5名
 (保育専攻科1年生2名 保育専攻科2年生1名 介護福祉専攻10名
 保育科2年生2名 保育科1年生7名)

活動内容 長野県小布施町の新生病院・新生礼拝堂および須坂市のナーシングホーム須坂にてボランティア活動

※2018年6月6日(水) 名古屋柳城短期大学の大学礼拝にて報告会を実施

	1日目 8月26日(日)	2日目 8月27日(月)	3日目 8月28日(火)		
7:00		起床、朝食づくり	起床、朝食づくり	7:00	
8:00				8:00	
	08:45 バス着	8:30 朝の祈り	8:30 朝の祈り		
9:00	9:00 本学 学生ロッカー前集合	9:30～10:30 2グループに分かれる	9:00～11:30 ①新生病院3階東テラス、4階屋上テラス、中庭の園芸・清掃ボランティア	9:00～11:30 ②新生礼拝堂・スタートハウス・礼拝堂周辺の清掃ボランティア	9:00
	9:30 発 バス出発	①介グループ 新生病院の歴史、スピリチュアルについて			②保グループ ミ・パカ保育園
10:00	10:40 着 10:55 発 恵那峡SA	11:00～12:00 2グループに分かれる	11:30 発 新生病院出発		11:00
11:00		①小布施複合施設でのミニコンサート、ハンドマッサージ		②ナーシングホーム須坂でのミニコンサート	
12:00	12:00 着 12:45 発 駒ヶ根SA	12:00～14:00 昼食 メイプルのお弁当(スタートハウスで)	11:45～12:45 温泉		12:00
13:00					13:00
	13:40 着 安曇野IC	14:00～14:45 全員	13:20～14:20 昼食		
14:00	14:10 着 安曇野ちひろ美術館	新生病院2階通所リハビリテーションでのミニコンサート、ハンドマッサージ			14:00
		15:00～15:45 2グループに分かれる	14:30 発		
15:00	15:30 発 安曇野ちひろ美術館	①介グループ 緩和ケア病棟	②保グループ スタートハウス	15:45 着 16:25 発 梓川SA	15:00
16:00		15:45～17:30 全員 スタートハウスで新生礼拝堂信徒様と夕食準備			16:00
17:00	17:00 着 小布施あけびの湯				17:00
		17:30 夕の祈り	17:45 着 18:15 発 恵那峡SA		
18:00		18:00～19:30 新生礼拝堂信徒様との夕食(ミニコンサート)			18:00
	18:45 発 小布施あけびの湯				
19:00	19:00 着 新生病院 スタートハウス	食事の片付け	19:15 着 春岡IC		19:00
		19:45 発 スタートハウス	19:30 着 本学帰着		
20:00	20:00 祈り ミーティング	20:00 着 小布施穴観音の湯	20:00 解散		20:00
	20:30～22:00	温泉			
21:00	設定保育、ミニコンサートの準備	21:30 発 小布施穴観音の湯			21:00
		21:45 着 スタートハウス			
22:00	22:00 就寝準備・就寝	22:00 ふりかえり・就寝準備			22:00

ちひろ美術館にて
##ハイポーズ##



保育園訪問
なにができるかな？



施設訪問で
歌を歌いました♪



介護施設訪問
笑顔!!笑顔!!笑顔!!



全員で
ディサービス 訪問!!



ハンドマッサージ
いかがですか?

素敵な教会で
—夕方祈り—



食事のしたく
おいしく作るぞー!!



病院のテラスに
お花をうえました!



最後に
みんなで笑顔——!!



参加学生のことば(1) -保育科・保育専攻-

出会うこと、思いやること、繋ぐこと

29H02 黒岩 菜由

第2回となった今年度の信州リトリートは、どの活動においても「出会いと思いやり」が主題となっていたように思います。リトリートを行うにあたり、大変お世話になった新生病院のチャプレンである大和さんは、リトリート中に行った3回の礼拝の中で聖書の言葉を用いて、出会いと歩み合うこと、話すことの尊さについてお話して下さいました。まさに、準備会から含めたこの活動のテーマだと私は思い、感銘を受けました。

今年度から活動の中に新生病院の敷地内にあるミス・パウル保育園で保育をさせていただけることになり、絵本の世界から広がる大型シアターを主活動とした保育を2グループに分かれて計画しました。準備会から試行錯誤し、練習を積み重ね、前日の夜に行った最後のリハーサルまで変更に変更を重ねました。保育当日は、愛おしい笑顔の子どもたちと、優しい先生方が私たちを温かく受け入れて下さり、楽しみながら保育をさせていただくことができました。1.2歳児クラスに入らせていただいた私たちのグループは、想定よりも問いかけに反応してくれる子どもたちが多く、様子を見ながら、当初予定していた流れを変更して保育を進めました。計画通りに進まないことも保育の面白さであり、魅力であると改めて感じました。保育園の先生から『『ぞうくんのさんぽ』は子どもたちの大好きな絵本で、知っているお話だったから余計にみんな楽しそうで、嬉しかった』と声をかけていただき、手応えを感じることができました。また、保育園での活動が終わり、「緊張した」と言いながらも、達成感に溢れた素敵な表情を見せてくれた後輩たちの姿がとても頼もしく、嬉しく思いました。

昨年度同様、ナーシングホーム須坂でのミニコンサート、新生病院通所リハビリテーションフロアでのミニコンサート・ハンドマッサージを通して、ご高齢の方とも関わることもできました。特にハンドマッサージでは、1対1でゆったりとお話しさせていただくことができ、「若い人の歌声が嬉しくて、

涙が出た」、「いつもはあまり歌わないけど、お姉ちゃんたちが楽しそうだから一緒に歌っちゃった」と笑顔でお話しして下さいました。言葉でも嬉しく、私も思わず笑顔が溢れました。言葉での会話だけでなく、ハンドマッサージでの手と手の触れ合いにより、心が通じ合い、マッサージをする側である私にとっても楽しい時間となりました。言葉と触れ合いによる心の繋がりは、ご高齢の方との関わりだけでなく、保育にも通じると思っています。介護と保育、仕事は異なりますが、この活動での経験は人と関わる職業の原点なのではないかと感じました。

2日目の夕食は、新生礼拝堂の信徒の皆様が私たちのために美味しい夕食を準備して下さい、共にテーブルを囲んだ夕食は、とても楽しいひと時となりました。また、昨年度に引き続き参加した学生にとっては、嬉しい再会の時間ともなりました。私自身も「震災ボランティアに行った子だよね？去年も一緒に机だったね」と会話の内容まで覚えていて下さっていることに感動し、再会を心嬉しく思いました。他のテーブルでも再会の喜びの声が聞こえ、温かい空気に包まれました。さらに、昨年度のリトリートで大変お世話になった金先生と再びお会いすることができたことも、このリトリートでの大きな喜びとなりました。夕食会の最後には、聖歌を中心としたミニコンサートをさせていただきました。プログラム最後の「信濃の国」を歌い始めると、私たちの声に信徒さんの声も重なり、スタートハウスに歌声が響きました。信徒の皆様と再会できたことの嬉しさ、共に過ごした仲間たちの歌声、見守ってくださる先生方の優しい表情、またリトリートでの最後のコンサートだと考えると思わず涙がこみ上げてきました。リトリートに参加してよかったと心から感じた瞬間でした。

柳城と同じ日本聖公会に連なる病院である新生病院、並びに新生礼拝堂で、信徒の皆様と過ごすことのできた、この2泊3日のリトリートを通じ、

人と関わることにより得られる力の大きさ、そして柳城生であることの誇りと喜びを改めて感じました。このリトリートで出会った子どもたち、利用者の方々、信徒の皆様と過ごした尊く、優しさと愛に溢れた時間は、私たち学生的心里に大きな喜びと今後の学生生活、その後の道への覚悟をもたらしてくれました。

また、リトリートは私にとって学年を超えた仲間たちとの出会いともなりました。普段から一緒に過ごすことの多い保育専攻の後輩だけでなく、関わる機会の少ない保育科や介護専攻の学生と共に活動できたことは、残り少ない学生生活をより色濃くしてくれるのではないかと感じています。

柳城に入学してからの保育科・専攻科での4年間、毎年夏にはキリスト教センター主催のボランティア・リトリートに参加してきました。夏季休業中の過ごし方は学生によって各々ですが、私はこの宿泊型ボランティア・リトリートへの参加を選択したことに誇りを感じています。普段の学生生活では感じることのできない感動や充実感、出会いや繋がり等、ここには書き尽くせない感謝と学びは私にとって心の肥やしとなりました。この先、保育者として歩む上で学生生活を振り返った時、

「夏のボランティア・リトリートに参加してよかった」と思い返すのだろうと思います。保育者としてだけでなく、人として成長させてもらえた、この活動を企画し、支えて下さった先生方をはじめ、この活動に関わって下さった全ての方に、この場を借りて感謝致します。本当にありがとうございました。私たち学生と信州リトリートで出会った全ての方々とのささやかながら、温かい繋がりがこの先もずっと続きますように。



リトリートで感じたもの

30H07 佐藤 愛結美

リトリート。それは、普段の日常生活の場から一旦物理的に離れて、リラックスしたり自分自身を見つめ直したりする、そんな機会のことを指す。昨年度に続いての参加となった今回のリトリートでは、保育園での活動が新たに加わった。そのこともあり、準備の時から当日は活動を上手く行うことはできるだろうかと緊張や期待、不安など様々な思いが混在していた。

1日目。最初の目的地である安曇野ちひろ美術館に向かうまでの間、自分の住んでいる地域では見られない、自然豊かな景色をバスの窓越しに鑑賞しながら向かった。途中、2日目の活動内容にあるミニコンサートの歌の練習も行った。確実に合わさっていく歌声はみんなの心を映し出しているようだった。

安曇野ちひろ美術館では、主に絵本画家であ

る岩崎ちひろさんについて学びを深めることができた。ちひろさんの描いた絵は絵本を通してアルバイト先の保育室や学校の図書館などで見る機会があった。これまで私の中でちひろさんは、数いる絵本画家のひとりではしかなかった。しかし、ちひろさんの絵画の原画を鑑賞し、生涯について知っていく中で、「子どもの幸せ」と「平和」に対して並大抵ならぬ思いを持っている方だと知った。保育者を目指すものとして、この「平和」や「子どもの幸せ」に対する切望は受け継いでいきたいと感じた。

安曇野ちひろ美術館を出た後は、小布施町の温泉に向かった。温泉宿で夕食をとる頃、日が沈み始めて刻一刻と姿を変えていく光景が窓の外に見渡せた。北信五岳に隠れた日が作り出す夕焼け空は絶景そのものであった。その後、2泊を

過ごす場であるスタートハウスについてからは、翌日の日程確認や宿泊の準備を整えて、2日目の活動の練習を行った。思い残していることはないか、不安な点はないか、リトリートが始まる前から何度も確認してきたが、最終確認をして練習を終え、1日目が終わった。

2日目はリトリートの中でも保育やミニコンサート、ハンドマッサージなど多くの活動が詰まった1日であった。

2日目の初めの活動はミス・パウル保育園での保育だった。保育者を目指している者として「保育園」という場での活動は、やはり他のどの活動よりも緊張は大きかった。しかし、子どもの姿を見た途端、緊張は嘘のようにほぐれ、笑顔で活動を始めることができた。保育中、同じ保育室で活動した他の学生の表情も、生き生きとしていて、練習の中で何度か伝えていて、自身の目標でもあった「子どもの姿に合わせて」という保育が達成されたように感じた。言葉だけでなく表情やジェスチャーを用いたコミュニケーションを取りながら保育を行うことで、初めは子どもも学生も緊張感のあった保育室も次第に和んでいき、学生の投げかけや問いに対して積極的に指差し等で答えてくれる姿が見られた。最後はハイタッチでお別れをした。

次に、ナーシングホーム須坂と新生病院の通所リハビリテーションでミニコンサートとハンドマッサージを行った。どちらの場所も昨年にもミニコンサートとハンドマッサージを行った場所であったため、昨年度に出会ったご高齢者の姿も多く見られた。ミニコンサートではご高齢者の方に楽しんでいただけるように、昭和の時代の曲を中心に選曲を行った。一緒に歌ってくださる方が多く、自身が歌っているながらもその歌声が聞こえてきて穏やかな気持ちになった。ハンドマッサージでは事前に友人と練習をした際に「力が優しすぎてくすぐったいかもしれない」というアドバイスをもらっていたため、力加減に特に注意しながらハンド

マッサージを行った。相手の方に力加減について伺うと「こっちは指はすぐく伝わるけどこの指はあまり伝わらないな、なんでだろうな」と真剣に考えながら答えてくださり、「昔に卓球をやっていて、この指だけ皮膚が厚くなるとるかもしれない」と昔の話などをしてくださった。また、マッサージをした後は「手があったかい！」と笑顔で私に話してください、私もお話をしながら自然と笑顔になった。普段、生活の中で深くかかわることのなかった高齢者の方とゆったりとリラックスした時間を過ごすことができ、良い経験となった。

この日の夕食は現地の新生礼拝堂の信徒様との食事会だった。この食事会には柳城の大先輩の方もおられ、当時の柳城の様子などのお話を聞くことができた。また、最後にはミニコンサートを通して、2泊3日のリトリートを支えてくださった皆さんに感謝を伝えた。

3日目、最後の活動として、2泊を過ごしたスタートハウスや礼拝堂、その周辺の清掃をさせていただいた。清掃を行う中でリトリートを振り返ってみると、たくさんの思いを乗せてスタートした3日間はあつと言う間に終わってしまったと感じた。また同時に、昨年にも続いての参加ではあったが、新たな出会いがあり、人との繋がりがや自然を感じることができた。

「リトリート」は最初にも述べたように、普段の日常生活の場から一旦物理的に離れて、リラックスしたり自分自身を見つめ直したりすることが目的となる。今回も、リトリートによって普段の生活では感じることはできなかった自然や、リトリートをしていなかったら関わることができなかつたら人との繋がりをを感じることもでき、リラックスしたり、自分自身を見つめなおすきっかけにもなった。この日のことを忘れずに今後も様々なことに前向きに挑戦していきたいと思う。



今回、二度目のリトリートに参加し、昨年とは異なった経験となりました。今年は専攻科という立場で、後輩が多く参加する中でのボランティアとなりました。

昨年と同様、長野県小布施町にある新生病院の通所リハビリテーション・センターでのミニコンサートとハンドマッサージのボランティア、ナーシングホーム須坂でのミニコンサートに加え、今年は新生病院内にあるミス・パウル保育園での保育にも参加させていただきました。

一日目は、安曇野ちひろ美術館に行きました。ここは岩崎ちひろの両親が信州出身であるという縁もあって、1997年、東京のちひろ美術館の開館20周年を記念して建てられた場所だそうです。広い敷地には『窓ぎわのトットちゃん』を再現したモニュメントがあり、生きた絵本の中にあるような環境で、自然と触れ合いながら楽しむことができました。広場では、物語の中のエピソードをたどりながら、散策することができました。美術館の中では、岩崎ちひろさんが描いた数々の絵が飾られており、見方・焦点を変えるだけで絵の見方が変化し表現の仕方で人々を魅了させるのだと感じることができました。また、美術館の中は仕掛けがたくさんあり、子どもの目の高さほどの位置の壁に丸くり抜かれた穴がありその穴を覗くと私達が見たことのある絵本の世界になっていました。そこには、ぬいぐるみが置いてあったり、絵本の一場面が描かれていたり、のぞき穴が万華鏡になっていたりしました。大人も子どもも楽しめるような空間になっており、発見が絶えませんでした。

二日目には、新生病院内にある保育園での保育と、ナーシングホーム須坂でのミニコンサート、新生病院の通所リハビリテーションでのコンサートとハンドマッサージのボランティアを行いました。

ミス・パウル保育園では、参加型保育を行いました。内容は、『だるまさんが』と『きんぎょがにげた』の絵本を用いた保育です。当日までの準備期間は、上手くいか不安で仕方がなく、リトリート一日目の夜に練習を何度も行いました。当日になって、子ども達の姿を見ると不安だった気持ち

が少し楽になり、今日を楽しんでくれたら嬉しいという思いを込めながら活動をすることができました。子どもたちにとっては初めて会う学生ばかりだったので、人見知りや不安を与えてしまっただけではないかと心配になりました。しかし自由遊びの時には、傍に来て遊んでくれる子どもたちの笑顔が見られ、安心しました。子ども達の素直な態度に共感でき、また、子どもたちへの私の関わり方を見直すことができました。

通所リハビリテーションでのミニコンサートの選曲に至っては長野県出身である高野辰之作詞の曲を多く選曲しました。一緒に歌ってくださる利用者の方々は大勢おり、施設内一体となって歌うことができました。長野県の県歌でもある「信濃の国」を一緒に歌うことで、利用者のみなさんとさらに一体となることができました。ミニコンサートが終わった後は、ハンドマッサージを行いました。利用者の方と直接にかかわることができる機会です。利用者の方の手をマッサージしながらお話をすることができました。コンサートで歌った曲の話をしてくださり、「歌は今も昔も変わらない、だから思い出になり、歌い継がれていくんだね」とお話してくださいました。誰かに歌を届けるということはいつも感じてはいましたが、その意味をそれほど強く意識したことはありませんでした。しかし利用者の方の話を聞いて、私たちの歌声がこんなにも利用者の方に届くものであるということに気づかされ、その歌の影響力は相手の心を揺り動かし、記憶を呼び起こす力があるということを改めて感じるすることができました。また、「今までの人生の中でマッサージされるなんて初めてだよ」「今日はありがとう」「また来てね」と声をかけられ、自分の存在を認められているように感じました。

新生礼拝堂のゲストハウスであるスタートハウスで、夕食を摂りました。信徒さんたちと一緒に夕食の準備をし、一緒に食事をします。老若男女合同で食事をしました。年代も様々であったため、いろいろな話を聞くことができました。昨年もお世話になった方々がテーブルに招いてくださり、私たちのことを覚えていてくださった方もいました。前回伺った時に洗礼を受けていない、とお話してくださった方は今年洗礼を

受けたとの報告をしてくださり、一年という時の流れを実感しました。

三日目の朝では、朝の祈りが終わった後、グループに分かれ新生病院三階東テラス、四階屋上テラス、中庭の園芸・清掃を行うグループと、新生礼拝堂・スタートハウス・礼拝堂周辺の清掃を行うグループに分かれ活動しました。三日間お世話になった感謝の気持ちを込めて活動しました。

昨年と同様、スタートハウスに招いてくださった心優しい思いに非常に感謝しています。新生礼拝堂の信徒のみなさまが、宿泊のための布団や

枕を提供してくださいました。また、スタートハウスの清掃の準備や食事の用意など、信徒の方々が教会に集まってすべて手伝ってくださいくださいました。

この三日間、感謝し感謝される日々となりました。



ボランティアを振り返って

29A12 角谷 侑香

私はこのボランティアを通して学んだこと感じたことが2つあります。

1つ目は、大学生活の中では出会うことのできない人とハンドマッサージをしながら会話することができ、自分が知らなかったことをたくさん聞くことができたということです。ボランティアに行く前は相手に気持ちよくなってもらいたいと思っていましたが、実際にやってみるとお話の中で様々なことを知ることができ、私のほうが学ばせていただきました。また、その中で課題も見つけることができました。人と話すときに、話すことが得意でない相手であるような場合には、自分が話題を振らなければなりません、相手に不快な思いをさせない話題を考えることや、年齢が違ってもお互いに楽しめる話題を探すことが難しく、もっと様々なことを知っていれば話題にも困らず無理なく会話できたのではないかと思います。これから様々なことを学んで、他の人とのコミュニケーションが取れるようにしようと思います。

2つ目は、ミニコンサートを行った際に聞いてくださった方の中に目を潤ませる方がいたことです。その方を見るときに、ボランティアに来るまでに先輩や後輩と一緒に練習して気をつける点や

工夫する点を実際に歌いながら試行錯誤してきたので、努力した歌で目を潤ませてくれたのは本当に嬉しいことですし、頑張ったと思えるミニコンサートになったのではないかと思います。

また、保育園で設定保育をさせていただく際には事前に内容を決めたり、その製作をしたりと、準備の中で先輩の発想や保育の立て方などに直接触れることができました。実習などで今まで自分がやってきたものとは違って、子どもの年齢に合わせて細かいところまで考えられていて、準備の段階で学ぶことが多く、勉強になりました。その中で課題に思ったことがあります。実際に子どもと関わるときに初めのあいさつをやりましたが、子どもにわかりやすい言葉がなかなか出てきませんでした。事前に話すことを考えて子どもの前に出れば、自分たちが何をしに来たのか伝えられたのではないのかと思いました。このことから、話すことや保育内容も事前に練習やメンバー内で合わせをすることによって、どこを直すべきか、動きを変えるべきかを話し合っ準備ができ、子どもの前で行うときに失敗が少なくできるのではないかと思います。

以上のことから、事前に準備する大切さや、一

緒に行く人と打ち合わせして内容を確認し共有することの大切さや、他の人のために自分には何ができるのかを考えなおすことができた2泊3

日になりました。



人の中に、自分はあること

29B25 田代 結

私がこのリトリートの中で知ることができたのは、どんな人もひとりで成り立っているのではないことと、どんな人もひとりぼっちではないことと、それでも自分にとって本当の価値を見出すのは自分ひとりだけだということでした。

第一に、出会いや、経験の一瞬で心が動かされ、自分の目指したい姿や、大切にしたいものがわかってきて、今を生きる自分ができているのだと感じました。自分の内側だけで、ただ真剣に「向き合っ」考えているだけでは、自分がどんなことに感動して、どんな生き方をしたいのかに、気づくことは難しいです。自分の中に、自分だけの答えが潜んでいるのは確かですが、それは、探すよりも、行動するうちに現れたり、出来上がっていったりするものだと、このリトリートを通して思いました。

1年生とも仲良くなろうと進んで声をかけ、心を開き、笑いあう先輩の姿を見て、素敵だと思い、自分が「何かを得ようとするリトリート」に精一杯だったことに気づきました。ひとりで何かを得られることなどないのに。1年生は、リトリート全体の雰囲気も、流れもわからず、馴染みの顔も少なく、何をするにも不安があったと思います。その気持ちは、1年生のときに参加した私なら分かるはず

なのに、そして今でもまだ同じように不安な気持ちはありながら、なんとかやっているにすぎないのに、自分から心を配り、手を差し伸べられなかったことを反省したのは、最終日でした。あの子は大丈夫かな、どんな気持ちかな、と考えることは、意識するよりも、自然にすることです。保育者としても、人としても、携えていたい、携えていなければならない力だと思いました。今回の経験から、これから学校でリトリートの仲間と出会ったとき、ゼミで1年生と関わるときに、今度こそは、困ったときに心の拠り所になる存在でありたい、という一つの目標ができました。

第二に、自分はひとりぼっちではなく、ひとりでは生きていけないことです。就職でうまくいかなかった報告をしても、驚かないで、受け止めてくれる存在があることのありがたさを感じ、「そうあることが当たり前ではないこと」とはこのことだと思いました。自分が、聞いてほしい、頼らせてほしいと思える存在のあることは、どれだけ幸せなことだろう。自分がそうやって、人と関わるという手段を選択できることが、どれだけ幸せなことだろう。活動には直接関係はないけれど、リトリートの仲間が、自分はひとりではないことを教えてくれたことが、嬉しかったです。

ハンドマッサージでは、長野県にいても、手を取り合って、出会えた喜びを同じように持てて、笑顔を交わすことができたことが、私の支えになりました。「私はあなたのことを忘れてしまうかもしれないけれど。」と言うおばあさんに、「かまわないです。」と答えられた理由がわかります。ずっと繋がっていることはできないかもしれないけれど、私も、その方も、一瞬だけ、心の深くで手を繋げたことは本当だと思います。

もう誰の助けも借りず、ひとりきりで生きていきたい、と思える時も、きっと誰にでもあります。しかし、私の場合は、人と触れると、心がほんのりと色づくことがわかりました。やっぱり、私は人間なのだと思いました。まだまだ浅い人生ですが、人と関わらないで生きていくことなんてできないのではないかと思います。

そして、このひとりぼっちではないことを伝えるために生きていきたいと思いました。私のぼんやりとしていた「今、大切にしたいこと」が、リトリートの中で、少しはっきりとしてきたようです。ひとりぼっちだと感じる人が、そう感じていることは確かです。「ちがうよ。」と言葉をかけることなどできないでしょう。それなので、私は、そっと傍にいたり、一緒にいられたりすることが私自身の幸せなのだ、喜びなのだ、それとなく伝えられたら、と思っています。その方法を、ゆっくりでも考えながら生きていきたいです。おばあさんになるまでに、いろんなことに揉まれ、立ち止まって、考えて、大事な考え方を築きあげればよいのではないかと思います。

第三に、何が大切なことかがわからなくなったとき、自分にとっての価値を信じていたい、ということ。このことを考えるきっかけになったのはひよんなことで、活動の移動中に乗った、タクシーの運転手さんの言葉でした。その方は、私たちが何をしに来たかを尋ねたので、私はとっさに、「ボランティアです。」と答えました。すると、さっぱりとした調子で返ってきた言葉は、「ボランティア？だったら大雨で被害にあっているところの方が、よっぽど必要としていると思うけど。こんな平和なところになくても。」というものでした。その方の話は続き、熱田神宮の大きな鳥居を見て感動したこと、反対に、はるばる出掛けて行った神社の鳥居がちっぽけでがっかりしたことも話して下さいました。運転手さんは、誰かのために汗水流すことは立派だ、大きなものは立派だ、と感じ

る心を持っていることが、その言葉から伝わりました。私は、途中から、何かの物語に入ったような気持ちで、とても客観的にその方の話を聞いていました。

昨年もリトリートに参加し、一緒に歌を味わえるだけでどれだけ自分の存在が嬉しく思えるか、何もないところから互いに喜びを生み出すことのできる人間の力はどれだけ素晴らしいかを知っているつもりの私は、これから行う歌やハンドマッサージが、被災地の援助よりも意味のないものではないと、信じていたい、という気持ちでした。それでも、「傍から見れば、運転手さんのような考え方が多いのかもしれない。」とも思っていました。その後、ミニコンサートを行い、互いに何かを感じ合えた喜びで満たされる一方で、運転手さんの言葉が忘れられないでいたのは、それが、自分が何度か立ち止まったことのある曲がり角だったからだと思います。その日の夜、自分の中にもあったその問いを考えました。

歌を歌う暇があるのなら、瓦礫をどかして、ものを探して、家を綺麗にして働いた方が、困っている人の役に立つのではないかと自分に問いかけてみます。やはり、被災地の援助は、全てのこの基本になる生活を保障するために、なによりも大切なことだと思います。自分の人生の中の時間と、労力を犠牲にして、すでに傷ついている誰かの代わりに苦しみも受けて、人助けをする人には、頭が上がりません。しかし、援助の経験のない私がこんなことは言えませんが、人と歌を歌って、お話をして、一緒に一瞬でも喜びを味わうことも、それに劣らないくらい

素晴らしいことではないかと思います。お医者さんがいて、八百屋さんがいて、お花屋さんがいて、私たちが生きていけるのと同じだと思いました。当たり前の答えだけれど、それぞれの役割がある。お花屋さんよりも、お医者さんの方がえらいという決まりも本当はありません。そして、「あの人に、ひとまず家が片付いて、明日に少しの希望を持ってもらうことができた。」という喜びの気持ちも、「遠く離れていて、初めて会った人なのに、心を通わせることができた。」という喜びの気持ちも、大きな違いはないように思えます。誰かに幸せになってほしくてしたことで、自分が喜びや満足を見いだせるから、できるのではないかと思います。それなので、誰か喜んでくれて嬉しい気持ちも、誰かと心を通わすことができ

嬉しい気持ちも、はっきりとした境目はなく、少し寂しいけれど、結局は自分が自分を好きでいられることが、人の心の一番の安らぎなのではないかと思いました。

私たちの手を、足を、声を、心を、どのように使うかよりも、自分から進んで、何か持っているものを使えないか、自分の恵みを分かち合えないか、と思いを巡らせることが、大事な部分なのではないかと思います。

タクシーの運転手さんと私は、歩んできた道が違うので、違う価値観を持っていて当たり前です。過ごした時間を宝物にして、生きる糧にするのも、しないのも、糧にできると判断するのも、しないのも、決まりはなく、自分次第です。当たり前のことですが、私たちは、今見えている共通の世界に住んでいるけれど、その中のもの一つひとつの価値は、その人によって違うのだと思いました。どれが正しい道、よりよい道、素晴らしい道だなんて正解はありません。それぞれの人が、自分の心のアンテナが動くことを確かに感じ、それを信じて、生きているのだと知りました。

まだまだ答えにたどり着いていない感覚が残りますが、ぼんやりとでも、自分の経験からそう感じることができたことが、私にとって大事なことでした。自分で得た答えだからこそ、信じ抜けるからです。

最後に、この二度のリトリートは、私が柳城で経験できた、最も大切な、いつまでも宝物にしたいものの一つです。人との交わりの温かさに気づいたり、その中での自分の在り方を考えたりする、豊かな時間を過ごすことができました。行動する力、自分を信じる力は、リトリートがもたらしてくれた私の成長です。どうか、これからも学生がそんな機会を得られる時間が、持てますように。計画、実行に携わって下さった先生方、大和チャプレン、金先生、お世話になった施設の方々、信徒の皆様、3日間を共にした仲間への、感謝の気持ちは伝えきれません。リトリートで得たことを大切に、どの子どもにも、その存在を優しく認め、心からの愛をもって仕える、保育者を目指します。たくさんのことを教えて下さり、本当にありがとうございました。

リトリートを通して学んだこと

30A06 梅田 澤奈

1日目の安曇野ちひろ美術館では、いわさきちひろさんやほかの絵本作家さんの絵本の展示やいわさきちひろさんの原画展を見ました。私は絵本を選ぶ際に、内容はもちろんですが絵がはっきりしているものを選びがちでした。しかしいわさきちひろさんの絵本のような、水彩画の淡く優しい絵はとても綺麗で温かく良いと思いました。またいわさきちひろさんは窓際のトットちゃんの挿絵も描いてらっしゃって、トットちゃんの話に出てくる電車の学校が広場に設置されていて、安曇野の山々や綺麗な空と相まってとても綺麗でした。その広場では、トットちゃんを読んでいない内容を知らない人でも楽しめるよう、ウォーキングルートに絵本の形をした内容が書いてある立札がたくさんあって、どんな人でも楽しめるようになっていて、とても気持ちのいいところでした。

2日目は、初めにミス・パウル保育園での約1時間の保育を行いました。園の子どもたちと遊んでいるときは、3歳児以下の子どもたちだったこと

もあり、普段わたしたちが話す言葉のペースでは子どもたちに思いを伝えることができませんでした。ゆっくり話すと段々笑顔になって次第に仲良くなれました。学校で学んでいたことでしたが、実際に話してみると私たちが思っている以上に幼児にはゆっくり話さないと思いを伝えることはできないのだと思いました。専攻科や2年生の先輩と行った大型ペープサートと手遊びでは、自分たち1年生は園児さんの反応が薄くてあたふたして、どうしようかと思っていました。そんなときでも先輩方は落ち着いていて話すスピードをゆっくりにして次のことを考えていました。幼稚園や保育所での実習を経験している先輩方がいてくださるといふ安心感はとても大きかったです。また、園児が手遊びを理解できていなかったときに専攻科の先輩が、もう一度繰り返して行っていて、私だったら自分が考えてきていた予定通りに進めてしまっていたと思いますが、子どもたちの様子を見ながら繰り返すことによってみんなが理解

して手遊びを楽しめるようにゆっくり教えていたのが、とても印象に残っています。自由遊びのときに木琴と一緒に遊んでいて、子どもたちに「これどうやるの?」や「あ!音鳴ったね!」、「すごいね!上手だね!」と言葉がけすると、とても嬉しそうに微笑みながら教えてくれました。一緒に感じて一緒に楽しむことが遊びの基本であり、共感する中で幼児は喜んでくれるのだと思いました。

ナーシングホーム須坂ではミニコンサートのみとなってしまうりましたが、紅葉の歌の司会の際に最前列にいらっしゃった方が「私この歌大好きなの」など、話しかけてくださり、みなさんが大きな声で歌ってくださったりして、とても楽しい時間を過ごすことができました。私はこのミニコンサートで司会をして、はじめは年配の方に向かって話すからとても緊張していましたが、みなさんがとても温かく見守ってくださっていて、目があたら笑いかけてくださってとても嬉しかったです。

新生病院の2階通所リハビリテーションでも、利用者みなさん大きな声と一緒に歌ってくださって、特に信濃の国は手拍子をしながら歌ってくださった方もいてとても楽しくミニコンサートを終えることができました。ハンドマッサージではミニコンサートで最前列にいらしゃってよく目が合っていた方にやらせていただきました。そこでは柳城のこと、長野県の果物やお米などの特産品のこと、歌がとても感動していただけたこと、月曜日だけの通所リハビリだったのでたまたまお会いできたこと、小布施町の変化していつていることなど、様々なこととお話しできました。ご高齢の方なので、はじめはとても気を使って話さないといけないと思っていましたが、自分のおばあちゃんのように温かくお話してくださって、私自身が元気をもらえました。また終わって帰るときに「楽しかったよ。ありがとね」と言ってくださってとてもうれしかったです。

信徒様との夕食会の準備と夕食会では、柳城の卒業生の方と無農薬野菜のこと、在学してらっしゃった頃のこととお話ししました。元々クリスチャンだったのでなく授業料のために洗礼を受

けて柳城に入ったこと、全寮制で6時に門限だったこと、建学の精神by love serve を大切にしていたこと、厳しかったけどもっと勉強しておけばよかったと思ったこと、卒業してから3年間柳城で務めてらっしゃったことなど、卒業生の方に直接聞くことができないお話を聞かせていただき、今とは違ったところ、今も柳城に受け継がれていることを実感できました。

3日目の園芸ボランティアでは、雨が降ってしまつて予定していた時間まで行えませんでした。普段交流できない介護専攻の先輩方や信徒様と一緒に活動ができて楽しかったです。また農業高校で園芸を学んでいたのも、より信徒様とお話できて、勉強してきたことが話のタネになったことで、自分が今まで高校の勉強を頑張つてよかったと思いました。そして短大の勉強もいつかそう思える日が来ると思つて頑張ろうと思いました。

帰りのバスに乗る前に信徒様方にお礼を言つて帰りました。そのときにも柳城の卒業生の方とお話できて、

握手をしてくださって、「話をしている、今も by love serve の精神が受け継がれていることが伝わつて、話できてよかった」と言つてくださって、今回のリトリートに行つてよかったと思いました。

今回のリトリートを通して学んだことを11月の幼稚園実習やこれからの実習に活用していきたいと思いました。また来年のリトリートの機会があればぜひ行きたいと思つています。



信州リトリートに参加することで、とても貴重な経験や出会いがありました。出発前にチャプレンとともに神様に見守ってもらえるよう祈りをしスタートしました。

1日目は安曇野ちひろ美術館に行きました。絵本の世界が敷地全体に広がっていて、仕掛けを見つけたり、ウォークラリーのようなクイズもあって、あっと言う間に時間になっていました。「いわさきちひろ」さんの年譜や愛用品が展示してあり、人物像を知ることができました。美術館に行くまでには「いわさきちひろ」さんの名前すら知りませんでした。調べたり、訪れることで黒柳徹子さんの「トットちゃん」シリーズの絵を書いていた人と気づき、様々なことを知ることができました。特に「窓ぎわのトットちゃん」はトットちゃんを知った初めての本で、読み始めたら時間を忘れてしまう本でした。この巻を題材として再現されていた広場があったので本当に嬉しかったです。読んでからかなり時間が経っていても再現度の高さに場面が蘇り懐かしい気持ちになりました。「いわさきちひろ」さんの絵は優しく、かわいらしいので彼女を知り、沢山の作品を間近で見ると更に好きになりました。スケジュールに入っていなければ知らないままだったので、入れてくださって良かったと感じました。その後温泉に行き夕食を食べて、これからお世話になる新生病院のスタートハウスに到着しました。夕の祈り、ミーティングの後は2日目の最終チェックをして寝床につきました。布団に寝転んだ時はいつの間にか初日の活動が終わっていた感覚で、とても時間の流れが速く感じました。

2日目は朝食後、朝の祈りとミーティングをして、活動が始まりました。午前中は新生病院の敷地内にあるミス・パウル保育園で保育ボランティアとナーシングホーム須坂に訪問しミニコンサートをさせていただきました。保育園では事前に準備して行った設定保育を行いました。事前に沢山工夫をして流れを考え道具が揃っていても、実際に会うまでは子どもたちに楽しんで、満足してもらおうこととそれ以上に自分が楽しむことが大切と意識するあまり、始める前はとても緊張してしま

た。しかし、実際の現場では、子どもたちの反応に合わせて臨機応変に対応することに戸惑いもありましたが、緊張しすぎることもなく自ら楽しんで行えました。練習との違いの大きさを知り、まだ設定保育をした事が無い私にとって、これから先に繋がる貴重な経験をさせていただきました。ナーシングホーム須坂では昔懐かしい曲と長野県所縁の曲を披露させていただきました。歌い始めてすぐ利用者さんが涙を流されていたのを見てもらい泣きしてしまいそうになりました。また、歌詞を書いた模造紙を持って行ったので、一緒に歌ってくださる利用者さんもいてとても嬉しかったです。私たちが元気を届けるだけでなく、逆に私たちに励ましを贈ってくださったように感じました。午後は通所リハビリテーションでミニコンサートとハンドマッサージを行い、スタートハウスで新生礼拝堂の信徒様と夕食準備、夕食の後はミニコンサートをさせていただきました。通所リハビリテーションでは初めてハンドマッサージをさせていただいたので、上手くいか初めはとても緊張していました。しかし、手を触れて会話をしていくうちに心も体も暖かくなり、心地よい時間となりました。私の担当した人は麻痺のある利用者さんで、コミュニケーションも取りづらくほとんど私の方から語りかけるばかりでしたが、私がどこから来たか、今日どんな活動をしていたか、長野で素敵だなと感じたのはどんなことかを話しました。施設の職員さんによると私が担当した利用者さんは普段はこんなに反応を見られることはないよとおっしゃっていました。少しでも気持ちや元気が伝わったことがわかりとても嬉しかったです。夕食準備は皆で野菜を切ったり和えたり、前チャプレンの金さん主導のもとで炊き込みご飯や、韓国料理の数々を作りました。皆で作った夕食は信徒様と皆で美味しく楽しくいただきました。ミニコンサートでは聖歌を沢山歌い、信徒様とも一緒に歌えたのでとても楽しかったです。片づけも全員で行い、温泉に行き、ミーティングをして寝ました。沢山の方と出会う密なスケジュールだったのでとても充実した、実りある1日となりました。

3日目は最終日で現地では新生病院の中庭園芸・清掃ボランティアをさせていただきました。初めの一時間はよかったです、その後すぐに雨が降り始め勢いも次第に強くなってしまったので、残念ながら中断となってしまいました。短い時間でしたが、草抜きや花の植え替えなど少しでも役に立てていたなら嬉しいです。片づけて準備を終えたら、新生礼拝堂の信徒様とお別れをし、温泉に入ってさっぱりしてから帰路につきました。途中で信州そばを昼食にご馳走になり、とても美味しかったです。

この三日間を通して、とても貴重な経験をさせ

ていただきました。たくさんの刺激で溢れていました。これらの経験を胸にこれからの学生生活に生かしていこうと思っています。



信州リトリートに参加して

30A36 正木 祐子

この3日間、いろいろなことを経験し、学んだことがたくさんあります。1日目はいわさきちひろさんが描いた絵が展示されている安曇野ちひろ美術館に行きました。その絵はとても惹きつけられるもので感動しました。ちひろさんは「世界中の子どもみんなに平和としあわせを」ということばを残しています。絵を通して子どもの幸せを願っていたちひろさんはとても素晴らしい女性だったんだなと思いました。私も子どもの幸せを願い、子どもの未来を創れる、そんな保育者になりたいと思いました。

2日目は、保育園とサービス付き高齢者住宅、通所リハビリテーション施設に訪問しました。子どもたちに出し物をしたり子どもたちと触れ合ったりしました。高齢者の方には季節の歌を披露しハンドマッサージをしながら交流をしました。1週間みんなで試行錯誤して制作したり練習したので、子どもたちや高齢者の方が楽しそうに見てくれたり、一緒に歌ってくれたので、終わった後はとても達成感がありました。実習や将来、保育現場でも生かせるので良い勉強になりました。高齢者

の方とはあまり関わったことがないのでどう接したらいいのか不安でしたが、ハンドマッサージをして「気持ちいい」と笑顔で言ってくれたので、とても嬉しかったです。

その夜に新生礼拝堂信徒様と夕食をしました。私は、この大学に入るまではキリスト教とは縁がありませんでしたが、キリスト教に興味がありこの大学に来ました。最初はキリスト教のことを全く知りませんでしたが、聖書を読んで学んでいくうちに、イエス・キリストが伝えたかったことを知ることができるようになりました。信徒様と会話をしながら、キリスト教のことをいろいろ聞いてキリスト教は興味深いものだとしてさらに実感することができました。夕食後に信徒様に讃美歌を披露しました。讃美歌はとても心に響く歌ばかりで、聴いている人も歌っている人にも自分自身を見つめることができる歌だと思いました。また、大学でもやっている礼拝や朝のお祈りをリトリートでもやり、さらに自分自身を見つめなおすことができました。大学でもキリスト教についてもっと学んでいき、大学の建学の精神でもある「By Love Serve～愛をもって仕

えよ～」を心に刻んで生活していきたいと思
います。

最後には、お世話になった新生病院・スタートハウスと新生礼拝堂の掃除をしました。ご飯作りや掃除、移動をする時に自分で考えて行動しなければいけなかったのも大変でした。しかし、小布施穴観音の湯で疲れを癒したり、小布施の蕎麦を食べたり、友達や先輩、先生方と交流ができ、とても楽しかったです。来年もぜひ参加したいです。



信州リトリートを振り返って

30B04 今泉 樹乃

私は2018年8月26日(日)～8月28日(火)、信州リトリートに参加した。参加者は介護福祉専攻の方々、保育専攻や保育科、引率の先生方合わせて30人弱で、バス移動をしながら長野での3日間を過ごした。これから以下に内容を時間系列ごと、大まかに報告していこうと思う。

初日、学校からサービスエリアを経て約5時間、最初の目的地である安曇野ちひろ美術館に着いた。ここは、ちひろ美術館の開館20周年を記念して建てられたところで、絵本画家のいわさきちひろの美術館だけでなく、世界の絵本館や「窓際のトットちゃん」の世界を再現したトットちゃん広場などもあった。私の母がいわさきちひろの絵が好きで、小さいころによく見せてもらっていたので、独特なにじみの絵を見て懐かしく思った。また日頃、街の雑踏の中で揉まれて息苦しく感じていた分、広場から見える豊かな自然がキラキラ輝いていて気晴らしができた。

その後、小布施町にある新生病院のスタートハウスに着いた。ここがリトリートメンバーの活動拠点地で、食事や設備など3日間大変お世話になった。

2日目は朝の礼拝まで済ませた後、リトリートのメインで、夏休みをかけて準備してきた活動をした。まず介護と保育に分かれ、保育グループは、新生病院の職員の子どもの通っているミス・パウル保育園で設定保育を行った。2クラスのうち、私は0～1歳児クラスを担当した。当初より園児の人数は少なく学生と変わらない程で難易度は下

がったが、自分自身の経験値が少ないため0～1歳児特有の警戒心が見える中での発表は少し動揺してしまった。先輩方の安定感のある姿を見て、場数を踏むことの大切さを知った。

次に、小布施複合施設でミニコンサートを、午後には介護専攻と合同になり通所リハビリテーションでミニコンサートとハンドマッサージを行った。ハンドマッサージのやり方や手順は何とか覚えて行ったが、効能などの詳しい質問をされた時に上手く答えられず、隣の友人に助け舟をだしてもらったのが少し残念だった。しかし、長く住んでいらっしゃる地元の方だからこそ語れる小布施の魅力が沢山聞くことができ、私もここに住みたいと思う程素敵だった。

夕食はスタートハウスで新生礼拝堂の信徒の方々と一緒に楽しく食事を共にし、お礼のミニコンサートを行った。

最終日は保育科が朝食準備や朝の礼拝の当番で、私は礼拝の奏楽を担当した。大勢の人の前で間違えても決して止まることのできない奏楽の体験をした。その後、2つのグループに分かれて清掃及び園芸作業を行った。私は園芸を担当し、最後には雨に打たれてしまったが、徐々に土に触れる作業ができて心が癒された。

今回、リトリートに参加して自分自身で一番良かったのは、夏休みの準備期間だ。私は毎年長期休みを無駄な休息に使っていた分、正直準備の為に登校するのが厄介に思っていた。しかし全てが終わってみると、自分自身規則正しく有意

義な長期休みになったと思うことができた。そして何より、参加しなければ出会うことのなかった沢山の人たちと交流できたことや、その中で準備したもの以上の沢山の笑顔が見られて、大きな達成感を味わうことができた。

その反面、今後現場に出る身として課題も数えきれないほど見つけた。その中でも一番は、気づく力、そこから瞬時に判断し対応していく力が圧倒的に不足している事だった。保育や介護の現場でこの積極的に動く力がいかに重要か、そ

して今の自分がどれ程できていないのか、先輩方とのスピードの差で痛いほど思い知らされた。

今回初めての信州リトリートは、自然あふれる土地で人々との温かい関わりを持つことができ、心の面でリフレッシュすることができた。しかし、先輩方の安定感に委ねすぎて、つい受け身になってしまうことが多かった。ここで気付けた失敗を繰り返さないよう、今後の実習や将来の現場で出来る限り繋げていきたいと思う。

信州リトリートに行つて

30B26 中山 実莉

8月26日～28日に長野県の小布施町の新生病院でボランティアをやり、そこでは様々な活動をしました。

一日目は、安曇野美術館へ行き、いわさきちひろさんの作品をはじめとする多くの作品を見ました。それから小布施町へ向かいました。

二日目は、午前中に新生病院内の保育園、ミス・パウル保育園で設定保育をしました。

私は、0,1歳のクラスに行き、絵本『きんぎょがにげた』をもとにした設定保育をしました。私は、絵本を読む係でした。事前練習では、最初は本がぐらぐらしていたり、読み方が単調だったりしていましたが、先輩からアドバイスをいただき、本番では上手く読むことができました。子どもたちも喜んでくれてとても嬉しかったです。そのあと、ナーシングホーム須坂へ行きミニコンサートを行いました。利用者さんが一緒に歌ったりしてとても楽しかったです。

午後からは新生病院内の緩和ケア病棟へ行き、ミニコンサートとハンドマッサージを行いました。ミニコンサートは利用者さんが楽しそうに歌ってくださったりしてコンサートは大盛況でした。ハンドマッサージでは、利用者さんの方のマッサージをしながら利用者さんの方の昔の話などを聞き、とても楽しかったです。

新生病院での活動を終えたあと、新生礼拝堂

の信徒さんと一緒に夕食の支度をしました。野菜を切ったり、食卓に飾る生け花を生けたりしました。夕食の後は、信徒さんたちにミニコンサートで賛美歌を披露しました。

三日目には、お世話になったスタートハウス新生礼拝堂を掃除しました。きれいになった後、お世話になった人たちと一緒に写真を撮って帰路につきました。

今回のリトリートで特に印象に残ったのは、二日目の設定保育です。自分たちで準備をした出し物に子どもたちがこんなにも喜んでくれて、とてもやりがいがありました。また緩和ケア病棟でのハンドマッサージを通して人とのつながりを改めて感じました。今回のリトリートで経験したことはきっと今後の保育で役に立つと思います。



信州リトリートを振り返って

30B29 半谷 幸姫奈

2018年8月26日(日)~28日(火)の二泊三日で、信州リトリートに参加しました。

一日目は、安曇野ちひろ美術館を見学しました。この美術館は、画家・絵本作家として活躍していた、いわさきちひろさんの絵本や生い立ちのことは見ることができました。帽子関連の絵が多く、一つ一つに願いや思いが込められているのがわかりました。

二日目は、ミス・パウル保育園に1時間の保育実習と小布施複合施設でミニコンサートと新生病院通所リハビリテーションでミニコンサートとハンドマッサージをしました。保育園では、0,1歳組と1,2歳組の二グループに分かれての実習でした。初めての本格的な実習だったので、短い時間とはいえとても緊張しました。ただでさえ練習期間が短かったので不安でしたが、実際にやってみると反応してくれる子や一緒にやってくれる子がいて、最後まで楽しくやることができました。帰るときにはハイタッチをしてくれる子もいて、子どもたちも楽しんでくれたので良かったです。施設と病院でのミニコンサートは、見てくれた皆さんが歌詞カードを見ながら一緒に歌ってくれたり、涙ぐみながら一生懸命聴いてくれていて胸が温かくなりました。特にどのミニコンサートでも最後に歌った「信濃の国」は、皆さんと一番の大合唱になり、とても気持ちよく、楽しく歌えました。病院ではその後にハンドマッサージをしました。私は、病院にボランティアでお手伝いに来ていたという

女性にハンドマッサージをしました。隣にいたおじいさんが触られるのが苦手なので代わりに、ということでしたが、おじいさんはマッサージ中にも頻繁にやってもらってどうだ、気持ちいいか、と気にされていて、その思いやりの心に私が癒されて、幸せをもらいました。

二日目のボランティア活動終了後は新生礼拝堂の信徒様との夕食会とミニコンサートがありました。その中には柳城の大先輩の方もいて、当時の貴重な話も聞くことができました。今と昔ではシステムがかなり違いましたが、本質はずっと変わっていないと感じました。

三日目は、掃除グループと花の植え替えグループの二手に分かれてお世話になった新生病院の清掃をしました。私は植え替えグループで、病院にボランティアで来ている方に指導してもらいながら雑草抜きや植え替えをしました。途中で雨が降ってきてしまい、最後までやり

遂げることはできませんでしたが、きれいにすることができました。

この二泊三日の活動で、助け合う心や人を思いやる温かさ、先輩の偉かさなど様々なことを感じ、実際に体験することができました。近年では他人との交流の機会が減る傾向にある中、信州リトリートではとても貴重な経験をさせてもらえました。今回の経験を踏まえて、今後の実習や普段の生活に活かしていけるようにしようと思います。

信州リトリートに参加して

30C22 竹原 美咲

私は信州リトリートに参加しているいろんなことを考えるきっかけになったと思う。初めは先生に勧めていただいたから参加しただけだったが、参加させていただいてよかったと思っている。

一日目の安曇野ちひろ美術館では、まだ保育や絵本になれていなくてなんとなく読書は好きで聞いたことがある程度だった。ちひろさんは帽子と子どもと一緒に描き、帽子の大きさや色で子どもの感情を表現していると書いてあって、確かに

同じ帽子の子どもはいないと思った。子どものわかりにくい内面を分かりやすく書いていて、やわらかい絵の中にリアリティーがあるからこそずっと愛され続けるのだと分かった。

二日目のミス・パウル保育園での設定保育では、人生で初めての本格的に指導案を考えて計画に沿っての保育だった。先輩方に教えてもらいながら成功して子どもたちが笑っていたり、真剣に取り組んでいる姿を見るととても達成感があって

私一人で指導案を考えても子どもが笑ってくれるようにもっと勉強しなければいけないと思った。一つ一つ子どものことを考えながら小道具を作っている、先輩方や先生方、友達に見てもらおうと配慮が足りなかったりしたので、学校生活では一人で行動することが多いがみんな協力する大切さと楽しさを改めて実感できた。小布施複合施設や通所リハビリテーションでは、私は、ヘルパーとして介護職のアルバイトをしているからお年寄りの前では緊張もあまりしないと思っていたが、歌うときは緊張した。それでも、ハンドマッサージのときはいつも通りにお話ができたとと思う。私がハンドマッサージをさせていただいた方から自分の名前の歴史など興味深いおはなしを聞かせていただき、経験を積むこともできて充実した時間だった。夜は信徒の方々と一緒にご飯を作ったり、食べたり、聖歌を歌ったりと普段では経験しないような体験をすることができて、本当にリトリート(日常から非日常への避難)をしているのだと感じた。昔の柳城短大について聞けたり、介護専攻科の先輩はどんな勉強をなさっているのか教えていただいたりして、このようなかたちで結ば

れていくご縁は素敵だなと思った。

三日目は感謝の気持ちを込めて大掃除をした。先輩と私の二人で手洗い場と玄関を掃除して、もともと面識はあったが、もっと仲良くなれたと思う。教会を掃除しているときに自分の中を掃除しているような気持ちになって新しい気持ちになったとともに本当に終わってしまうのだなと少し悲しくなった。

三日間を通して、タクシーの運転手さんをはじめ、すこしでもかかわった人々との出会いは神様のお導きかもしれないし、信州リトリートは、私を大きく成長させてくれるものだったと思った。具体的には、私の人見知りがすこし改善されたり、11月の教育実習の前に、設定保育を身をもって体験できて、不安はあるけれども自信が持てた。ぜひ来年も参加して私にとっての非日常を体験するとともに、先輩方からもらった安心感や保育って楽しいという気持ちを後輩の人に伝えられたらいいなと思う。



参加学生のことば(2) -介護福祉専攻-

ハンドマッサージを行なって

30K01 秋田 里奈

私はリトリートの中でハンドマッサージを行ないました。ハンドマッサージを行なっていくなかで、利用者様から昔の話や、好きだった事、そして今現在の事など様々な話を聞くことができました。ハンドマッサージを通して心身ともにリラックスし、次第に緊張もほぐれた事により私自身も利用者様も楽しく話をする事ができたのではないかと思います。普通に座って話をするだけでは短時間での関わりなので、深い話をしたり心から笑い合ったりするのは難しいのではと思います。ただ向きあって話をするのではなく、ハンドマッサージなど触れ合いを大切に活動を行うことで、自然と笑顔になり楽しく話をする事ができるということに繋がっていくと改めて思いました。

利用者様と話をしている中で印象に残ったことは、「今は楽しいことはあまりないけどね、でも今日はすごく楽しいよ、マッサージしてくれて本当に嬉しいよ」と言ってくくださったことです。その方は昔仕事をすることが好きで、自分のプライベートより仕事を優先していたそうです。仕事をしていない今は楽しくないとおっしゃっていました。しかし、ほんの少しのハンドマッサージやミニコンサートでの触れ合いだったにもかかわらず、その方が楽しいとおっしゃってくださったことが私には今回の活動の中で

も一番嬉しく、やりがいを感じた瞬間でした。

地域での関わりを大切にしていく介護は、利用者様の心の面、楽しいという気持ちに繋げていく

ためにも積極的に取り入れていくことが非常に大切なことだと、改めて学ぶことができました。利用者様との交流でも、難しい発表や高度なことをするのではなく、誰もが親しみやすい心の落ち着く歌などの活動を少しでも多く行なっていくことが、日常の楽しみにも繋がっていくと思いました。私は介護士として来年から病院に就職をするので、このリトリートを通して学んだ経験を活かして、介護者の望む介護ではなく、利用者様の望む介護を大切にしていき、より良い介護とは何かを追求していこうと思います。



リトリートを振り返って

30K02 伊藤 理花

二泊三日のリトリートを振り返り、今回私は新生病院、新生礼拝堂の存在についてより深く学ぶことができました。また、福祉について改めて考える機会にもなりました。

今回、私が特に印象に残っていることは、新生

病院の利用者へ、ハンドマッサージを行なったことです。今年度は病院の中でもさまざまな事情で入院している方々とハンドマッサージを行う機会がありました。今までのボランティアで行ったハンドマッサージを振り返ると、私自身緊張してしまい、

汗をかいてしまうことに意識をしすぎてしまい、落ち着いてお話しすることができなかつた点がありました。しかし、今回のハンドマッサージは私自身も落ち着いて関われる事ができたと感じています。違いを感じる事ができたのは、ハンドマッサージを通してお話を重点的に、意識するだけでなく、相手を知ることが大切に行い、私自身も知ってもらう必要もあると感じたからです。今まで、利用者さんの話を聞いたり知りたいとばかりに集中しすぎてしまいました。しかし、相手を知るだけでなく、私自身についてもお話をすることで、お互いがリラックスする事が出来ると学びました。

わずかな時間でも深い交流ができました。しかし、もっと交流したいという気持ちも強く残りました。今後、福祉の仕事に携わる中で、一人ひとりと関わる時間は限られてしまう事があるかと思います。その中でも、相手を知ることについては丁寧に行いたいと今回学びました。

また、今回嬉しかった事があります。それは、新生礼拝堂の信徒さんとの晩食会です。私は、

偶然に昨年と同じ信徒さんとお隣で食事をする事ができました。同じテーブルで、食事をする中でお互い思い出し、とても嬉しい気持ちになりました。晩食後に私たちは信徒さんに歌をプレゼントしました。歌を用いて今年度も信徒さんと再び出会えた事、新生病院の利用者の方と交流できたことを振り返りました。

私は、1年、365日ある中で3日間もしくは1日しか出会う事がないと思っていました。しかし、その1日が人との関わりを広げ、記憶し私の頭の中では何日も、何年も続いていると感じました。振り返るきっかけが歌であったり、再びお会いしお話をすることで、より交流が続くのではないかと感じました。

これは地域交流や多世代の交流へとつながっていくのではないかと感じました。

このような交流の場を設けてくださった方々に感謝します。私も将来地域の人と自然と関われる場を大切にしていきたいです。

リトリートを振り返って

30K03 稲葉 詩歩

二泊三日を振り返ると、たくさんの経験をさまざまな感情を味わうことができた濃い時間だったと感じます。

病院でのミニコンサート、ハンドマッサージでは特に多くの方と関わりが持てました。

ミニコンサートは、介護福祉専攻科の仲間と協力して歌や楽器演奏の練習を重ねてきました。どんな歌が好きだろうか、一緒に楽しんでもらうための工夫は何ができるだろうか、とみんなで話し合いました。中でも「ペパニカ」での演奏は不安が大きかったです。手のひらサイズの楽器で、全員の耳に届くしっかりした音楽が奏でられるのかということなどの不安は、本番のそのときまで期待より強い感情としてありました。しかし本番では、小さい音にも耳を傾けてくれたり、手拍子をしながら大きな声と一緒に歌ってもらえたりして、とても安心して発表を進めることができました。また皆さんの笑顔が伝染して、私自身も笑顔で前に立つことができました。曲を一つずつ歌っていくにつれて、学生と皆さんが一つになっていく一体感

も感じられました。それぞれの発表が15分間という短い時間でしたが、非常にいい経験であり思い出に残っています。

ハンドマッサージでは、患者さんや利用者さんより近い距離で話をする事ができました。長野県のことや病院

での生活のことなどさまざまな話が聞けて嬉しかったし、反対に私に質問をしてもらえるときもあり、それも非常に嬉しかったです。話をしているときの笑顔や笑い声、優しい言葉が忘れられません。

宿泊したスタートハウスでは、柳城の仲間たちと長い時間を一緒に過ごしました。役割を分担して作ったご飯は、味もその過程も含めて全てが印象深いです。特に2日目の夜ご飯では、新生礼拝堂の信徒の方で柳城の卒業生でもある先輩方にアドバイスをいただきながら作ったのを覚えています。豆腐の切り方一つでも工夫があり、直接教えてもらったことが嬉しく記憶に残っています。また夜ご飯を終えてからの最後のミニコンサ

ートは、歌っていて見えるみなさんの表情や歌詞からぐっとくるものがありました。

今回のリトリートを通して、社会福祉について学びを深められ、また仲間との大切な思い出もで

き充実していました。学んだことをこれからに活かしていきます。

信州リトリートを振り返って

30K04 小木曾 菜々子

今回の信州リトリートに参加するにあたり、夏休み期間中何度も集まりミニコンサートの準備・練習を重ねてきました。曲を聴いてくださる方のことを想像しながら曲決めをしたり、何度も同じ曲を練習したり、日を重ねていくごとに信州リトリートへの期待が高まってきました。そして本番になり、信濃の国を歌うと自然と笑顔になる方や涙を流す方がいました。私たちが住む愛知県に県歌は存在しないため1つの歌にこのような思い入れはありませんが、県歌を聴いている方々の姿を見たり故郷や家族・友人を思い出したという声を聞いたりすると、年齢関係なく歌える県歌の素晴らしさを感じることができました。

また、新生礼拝堂・スタートハウス関係者の方々とは夕食会や清掃活動、礼拝などでお話をさせていただくことができました。その中で一番印象に残っているのは、夕食会で隣の席になった柳城卒業生の方との関わりです。当時の学校の様子や寮生活の話など、今では想像つかないことばかりだったので非常に驚き、新鮮に感じました。それと同時に柳城の卒業生の方とお話すること自体が初めてだったので、このような活動があると学校の伝統を受け継ぐ機会にもなると感じ、この場に参加することができて良かったと心から思いました。

さらに、新生病院グループの緩和ケア病棟・通所リハビリテーション・小布施複合施設の利用者の方々とミニコンサートやハンドマッサージを通して親睦を深めることができました。介護福祉

専攻の学生によるミニコンサートでは、「ペパニカ」という楽器を取り入れ、実際に触れ楽器を奏でることを楽しんでいただくことが出来たのではないかと感じました。ハンドマッサージでは、担当させていただいた方のいきがいや趣味、小布施町の魅力から最近の若者に言いたいことなどを話し、数分間の関わりでしたが祖父母と孫の関係になったのではないかと思います。い親密な関わりを持つことができ嬉しく思いました。

今回、緩和ケア病棟の利用者の方と関わるのが初めてだったため、話す内容に戸惑ったり、事前には病棟の雰囲気が掴めなかったりなど、リトリートに参加する前は不安な気持ちがありました。しかし、実際は思っていたよりも雰囲気が明るく、利用者の方々の笑顔も多く、ここでの生活が楽しいという声も聞くことができたため、緩和ケアに対するイメージが良い方向へと変わるきっかけとなりました。

最後に、小布施町が力を入れている地域福祉の取り組みを知り様々な施設の方と関わることができ、小布施町が良い町でなければ成立しないことや利用者の方々の小布施町に対する暖かい気持ちを強く感じ、地域福祉の良さを学ぶことができました。



リトリートを通して

30K05 香川 奈穂

今回の二泊三日のリトリートを通して、普段の学校生活では味わうことのできない体験をし、様々な人との出会いがありました。そして、この体験と出会いが、その人の人生に寄り添う専門職“介護福祉士”としての視点から、終末期ケアについて考えるきっかけになりました。

リトリート 1 日目。長野県の安曇野ちひろ美術館を見学しました。そこは、自然豊かで広大な土地の中に公園と美術館があり、周りは緑に囲まれた環境で、多くの花々に癒されました。展示室は、子どもから大人まで楽しむことができるよう、低く配置されていました。見学しているうちに、手に触れて見ることができる絵本やいわさきちひろさんの作品の世界感に引き込まれていきました。

2 日目は新生病院の歴史やスピリチュアルケアについてのお話を聞きました。1932 年、結核で多くの命が失われていた日本を救おうと、カナダ聖公会の働きによって開設された新生病院。これまでの海外からの支援と地域に根ざし支えあう医療の歴史があるからこそ、「すべての人に仕える病院」「癒しと看取りの医療」が今日まで受け継がれ、追求されてきたのだと思います。

講話後には、緩和ケア病棟を見学させていただきました。そこは、病院という場であるとともに、家にいる時のように感じられるような工夫が多くありました。個室一部屋につき一つの窓があり、窓の外には 4 階だからこそ味わうことのできる、緑豊かな景色が広がっていました。病室の一つ一つに花や木、果物の名前が付けられており、最期を過ごす場所として、みんなが愛着を持っているようにも感じられました。また、面会時間も決められておらず、会いたいときに会える環境、家族室が整えられている所に魅力を感じました。

2 日目の主な活動はミニコンサートとハンドマッサージでした。事前準備として、歌の選曲から始

め、利用者の方に喜んで頂くためにリトリート当日に向けてみんなで練習に取り組みました。

当日、利用者の方々を前にするととても緊張しました。しかし、私たちの歌を聴いて涙を流される方、一緒に歌って下さる方、笑いかけてくださる方の表情に救われました。いつの間にか緊張よりも、喜んで頂きたいという思いの方が強くなり、利用者の方々に勇気づけられていました。

コンサート後には、利用者の方と向かい合いハンドマッサージを通して交流を行いました。初めは、自分自身が話すことの方が多かったですが、マッサージを行うことで、徐々に利用者自身のお話を引き出すことが出来ました。

ハンドマッサージを行うことは、血流が促進され、安心感や幸福感に効果があります。非言語的コミュニケーションが自然と距離を縮め、リラックスしていただくことで信頼に繋がったと思います。

現代の日本では高齢者の単身世帯の増加や孤立死などの孤立問題が上げられています。終末期において、多くの方が関わり心の痛みや悩みに寄り添うことが、その人らしさを引き出す上で重要だと考えます。新生病院の緩和ケアのお話や活動を終えて、地域で安心して過ごすことができるように見守り、環境から整えて本人が孤立しないよう支援することが緩和ケアであることを実感しました。また、亡くなられた後にご家族のケアまで定期的に行われていることに驚きました。

今回のリトリートは私にとって多くの出会いの場となりました。多くの方と関わることで様々な価値観や地域の違い、一人ひとり違いがあることが当たり前で、自分らしさの重要性に気づかされました。そして人生の先輩方からの助言を頂き、自分の考えをより広げることに繋がりました。

自分自身も人と関わることで少しでも何かを与

えられるような人になりたいです。さらに、その人の人生に寄り添い受け止めることを心に留め今

後に活かしていきたいと思います。

リトリートが気づかせてくれたこと

30K06 澁谷 彩似

私にとっては2回目のリトリート。1年ぶりの再会や新しい出会いに期待をしつつ、今回は介護福祉専攻の授業の一環として参加した。昨年に引き続き、リトリートでの主な活動は、コンサートとハンドマッサージ、施設の利用者の方々と関わることだった。準備の段階から当日が楽しみで、歌も演奏も、前回の反省点を意識したり、グループに分かれて聞きあったりしながらの練習だった。その成果があっただけか、当日は大成功だった。一緒に歌ったり、泣いたり、手拍子をしたり、反応はそれぞれで、沢山の笑顔を見ることができた。今年も多くのお会いから元気をいただいた。私を成長させてくれた、濃くて短い3日間だった。

1日目は安曇野ちひろ美術館へ行き、いわさきちひろが生きていた時代を知った。ちひろの日記や、戦争に関する絵をみて、言葉に出来ないほどの切なさを感じた。現代において忘れられがちな戦争の恐ろしさ、戦争をしてきたという現実など、戦争について、改めて考えることができた。

2日目は、新生病院の歴史や緩和ケア、スピリチュアル・ケアについて説明を受けたり、見学をしたり、利用者の方々と実際に関わったりする中で、介護の現場について学びを深めた。

今年開設したばかりの小布施複合施設では、介護福祉専攻の学生10人が5人ずつの2グループに分かれて、2つのフロアでコンサートとハンドマッサージを行った。2日目で初めてのコンサートとハンドマッサージだったため、楽しみよりも緊張の方が大きかったが、無事に終わることができ、達成感が得られた。また、利用者の笑顔や、楽しそうに話をする姿をみて、もう一度行いたいという気持ちも感じた。

2か所目のコンサートは、新生病院通所リハビリテーションで、保育科、保育専攻、そして介護専攻の合同で行った。22人でのコンサートは、5人でのコンサートとはまた違う良さがあった。

3か所目は、新生病院緩和ケア病棟で、介護福

祉専攻だけで行った。緩和ケアについて学ぶことは目的のひとつだったため、緊張に慣れたはずのコンサートとハンドマッサージに、また違う緊張感があった。時間は沢山あったので、ゆっくりと時間をかけて、利用者の方と向き合うことができた。

最後のコンサートは、信徒さんとの夕食を楽しんだ後、信徒さんへの感謝の気持ちを込めて22人全員で行った。信徒さんと関わる中で、沢山の温かさにふれた。私たちのために食事や布団を用意したり、笑顔で受け入れてくれたり、周りの人の支えや協力があったからこそ、リトリートで学ぶことができるのだと実感した。

1日を通して、コンサートの楽しさ、音楽の素晴らしさを感じた。長野県県歌である「信濃の国」は、6番まで歌った。利用者の方々が、6番まで一緒に歌ってくれるかどうか不安はあったが、多くの方が最後まで歌ってくださったので嬉しかった。年を重ねても歌えるほど、長野県の方にとっては大切な歌だと思うと、今回のコンサートを行って良かったと心から思う。

また、ハンドマッサージでは直接触れることによって人の手のあたたかさを知り、1人じゃないという安心感が得られるように思えた。距離が一気に近づき、普段よりも話が弾む気がする。病気の話や不安など、話しにくいはずの話もして下さる。それは、ハンドマッサージが文字通

り互いに触れ合いながら1対1で向き合うためだと思う。介護の現場で、触れる、向き合うことが大切であることを改めて感じた。それにより、利用者の本当の気持ちに気づき、利用者の望むケアに近づけるのだと思う。

最終日は、園芸グループと清掃グループに分かれて行うボランティア活動が中心だった。わたしは清掃グループで、スタートハウスと新生礼拝堂の掃除をした。お世話になったことへの感謝と、これからも変わらず、あたたかい場所であるように思いを込めて行った。綺麗になると、私も嬉

しく、昨年と同様、私自身の心も綺麗になったような気がした。

来年は参加できないことが悔しいくらい、楽しく多くの学びを得られた2泊3日だった。3日間、沢山の「ありがとう」もらった。本当は、私の方が

感謝を伝えたい。コンサートやハンドマッサージができる場を与えてくれて、あたたかく迎えてくれて、リトリートに参加させてくれて、ありがとう。リトリートを終えた今は、感謝の気持ちでいっぱいだ。

リトリート活動に参加して

30K07 谷本 美空

専攻科介護福祉専攻の介護福祉士を目指す1人として、今回初めてリトリートに参加しました。リトリートとは、「仕事や家庭などの日常生活から離れ、自分だけの時間を見つめ直す機会となるように」という思いがこもった活動です。この2泊3日の活動を通して、様々な体験をさせていただくことができました。

1日目は安曇野ちひろ美術館へ赴き、絵本作家いわさきちひろさんが描く世界観に浸ることができました。子どもたちの感性を豊かに引き出す絵に囲まれながら、暖かい空気に触れることができました。さらに、ここ小布施の地は素晴らしい自然に囲まれていて、とても空気が澄んでいるのを五感で感じることができました。スタートハウスに着いてからは次の日のミーティング、リハーサルなどを重ね、1日を終えました。

2日目、私たち介護福祉専攻の学生は新生病院のスピリチュアル・ケアについての講話を受けました。終末期の方々へのケアで、QOL(生活の質)を支え、患者の心に寄り添う…。「何故自分だけが」「生きている意味はあるのか」「死を迎えるのが怖い」そんな魂の痛みに対するケアを、スピリチュアル・ケアと呼ぶのだそうです。大切なのは傾聴することであり、患者の話をしっかりと聞いて理解し、受け止める。それはとても単純で重要なことだと思いました。

講話後、私たちは小布施複合施設、通所リハビリテーション、緩和ケア病棟でハンドマッサージとミニコンサートを行いました。「こんにちは、よろしくお祈りします」と始まったマッサージでしたが、いい香りのするオイルを付け、ボディータッチをしていく事で相手の緊張もほぐれていくのが分かりました。施術中は家族の話、仕事の話など色々な話をしてくださいました。リラックスできる癒し空間を与える事もできますが、ハンドマッサージとは患者の皆さんと関わりを深めることの出来るコミ

ュニケーションツールの一つでもあるのだと感じました。手をさすって目を見て会話をする事でなんとなく手から感情が伝わってくるような、直接触れ合う事による心への効果もあったのではないかと思います。

また私たちは、この日のコンサートのために皆さんと一緒に歌える曲を選曲し、ペパニカという楽器も練習してきました。本番は自分の持てる力を尽くして精一杯に声を出し、どうか患者の皆さんの心へ…そんな思いで歌を届けました。一緒に手を叩いてくださる方、口ずさんでくれる方、目を瞑って静かに聞いてくださる方の姿を見て、心がぼっと暖かくなりました。コンサートが終わると「ありがとう」と盛大な拍手を頂き、達成感を味わうことができました。この活動を行うことができ、とても光栄に思います。

2日目の夕食は、新生礼拝堂の信徒の方々が私たちのために作って下さいました。私たちも共に手伝いをしながら食事の大切さを知り、「食べる人に喜んでほしい」という気持ちで取り組みました。美味しい料理を囲むと不思議と会話が弾み、自然と笑顔溢れる空間となっていました。食事の後には、今回のこの機会を作って下さった金先生や大和チャプレン、信徒さんへ向けての感謝の気持ちを聖歌に込めて贈りました。ハーモニーを奏で、歌をプレゼントするつもりが、歌に聞き入る皆さんの姿を見ながら歌っていると、私自身の心がとても暖かくなり涙してしまいました。確かに、その瞬間ここに幸せを感じました。

3日目は、お世話になったの方々へ感謝の気持ちを込めて、清掃や園芸活動を行いました。私は園芸活動をさせて頂いたのですが、ただ木を切ったり花を植えたりするのではなく、美しい花々が患者の方にとって癒しになればいいな、と考えながらの活動ができました。

この2泊3日の活動を通して、普段触れること

のできない環境の中でのボランティア活動をする
ことができ、改めてやりがいや達成感を感じま
した。自分の姿を見つめ直して、ゆっくりと歩み
を進めることで成長できたのではないかと思います。
最後に学び多きこのリトリート活動に関わった全

ての方々へ、感謝致します。ありがとうございました。



小布施町で学ぶ

30K08 日高 美裕

私は、リトリートに参加する前、なぜ行き先が長
野県小布施町なのかを疑問に思っていました。
しかし、2泊3日の学習をとおして、その理由を感
じることができました。

今回のリトリートで、ボランティアや社会福祉施
設等の視察研修に参加した一番の成果は、地域
での介護福祉を学んだことです。

私は、昨年度保育科の学生として、専攻科介
護福祉専攻の夏合宿に参加した経験があります。
その合宿では、地域と高齢者・障害児者の共生
をはかる福祉施設を回り、統合ケアを学びまし
た。

今回のリトリートでは、新生病院グループの病
院や施設のお話を聞いたり見学したりしたことで、
地域に密着した福祉を考える機会を得られ、昨
年度の知識とあわせて、地域における福祉活動
のよさや目指す未来を知ることができました。

また、ミニコンサートやハンドマッサージでの
入所者さんとの関わりをとおして、住み慣れた町
を離れることなく病気や障害、ニーズに合ったケ
アを受けられる複合型施設は、利用者や家族に
とって心に寄り添う福祉が受けられる場になると
感じました。

ミニコンサートでは、童謡や昭和の名曲、長野
県の県歌「信濃の国」を歌いました。童謡などを
数曲歌ったあと、「最後の曲は長野県の県歌『信
濃の国』です」と司会の学生が言うと、入所者さん
の嬉しそうな顔がみられました。6番まである長

い曲にもかかわらず、一緒に歌ってくださる方が
たくさんいらっしやっただけで、一生懸命に練習や
準備をしてきてよかったと思いました。

ハンドマッサージでは、ご家族や長野県のお
話を聞かせてくださいました。

病院でお時間をいただいた方は、左手にガー
ゼをはめていたため、右手のみマッサージを始
めました。ゆったりとマッサージをしていると、「温
かい手だね」「こっち(左手)もやってもらえる？」
と言われました。私は周りの学生よりもあまりお話
が弾まず、少しの申し訳なさを感じていたため、
患者さんがそう言ってくださったことを嬉しく思い
ました。また、「若くて綺麗な手だね。私のはシワ
だらけだから……」とも言われましたが、長い人
生を歩んできた証として、むしろ格好のよいもの
だと感じました。そして、自分よりも長く生きてこ
られた方の手に触れ、お話を聞く機会をいただけ
たことに感謝しました。

私はこれまで、治療は都市で発展したものを
受けるイメージがありました。しかし、都市にはな
い自然や、住み慣れた土地・家族の近く・在宅で
治療や介護福祉サービスを受けられることのよ
さを体感することができました。

名古屋よりも澄んだ空気のなかで学習できたこ
とや、大和先生をはじめ多くの方に心遣いをいた
だいたことに感謝し、この学びを今後につなげて
いきたいです。

リトリートを振り返って

30K09 安田 小幸

私は、介護福祉専攻の授業の一環で初めてリトリートに参加しました。そして、今回の参加は私にとって貴重な経験を与えてくれました。

1日目は、安曇野ちひろ美術館に行きました。この場所は、授業で鑑賞した映画のロケ地になっていたようで、映画の場面を思い返しながら見学しました。この美術館で特に印象に残ったことは、井上洋介さんの絵本展です。入り口付近にはとてもかわいらしくまの絵本が置いてあったのですが、最後の部屋に行くと、作者が少年時代に体験した戦争の絵が飾られており、見ている人に恐怖を与える絵でした。この展示には、とても強く深い印象を受けました。

2日目は、新生病院の大和チャプレンと徳竹さんから新生病院と緩和ケアについて聞き、ハンドマッサージとミニコンサートを様々な場所で行いました。最初に向かったのは、小布施複合施設です。私は1階の看護小規模多機能型居宅介護施設のさくらの園という場所で行いました。ここは通称「かんたき」といわれ、1つの施設で通い・訪問(看護・介護)・泊まりと利用者の生活に合わせてサービスを選択でき、住み慣れた地域での生活を継続できるように支援する施設です。ハンドマッサージでは、天気や長野についてのお話や、好きな歌について聞き、一緒に歌ったりしました。利用者の方がとてもリラックスして受けてくれている感じでした。ミニコンサートでは、ペパニカに興味を持ってくださったり、一緒に歌ってくださったり、手拍子をしてくださったり、涙を流されている姿があり、私もその姿を見て泣きそうになりました。

午後は通所リハビリテーション施設でハンドマッサージとミニコンサートを行いました。一緒に歌ってくださる姿がとてもうれしく、ハンドマッサージでも、利用者さんのお話をたくさん聞かせても

らえて、ハンドマッサージよりもお話に集中してしまい手が止まってしまうことが多々ありました。退場する時、ハンドマッサージを受けてくれた利用者さんが私のほうをずっと見てくれて、私が手を振ると振りかえしてくれたことが嬉しく、短い時間だったにもかかわらず、私は寂しくてまた泣きそうになりました。

2日目の最後は緩和ケア病棟でのハンドマッサージとコンサートでした。ここでは最後に参加してくださった入院患者さん一人一人と握手したとき、がんばってね、という声を多くかけてもらいました。また、「あなたの手、冷たいね。心があつたかいんだね。」と私の手をさすりながら話してくれて、温もりが伝わってきました。

3日目は、ガーデニングをしました。ガーデニングでは、プランターに入っていた土の入れ替えから始めました。土を入れ替えた後は、新しい土を入れて、プランターにどんな花を入れたら、入院患者さんは見えやすいのか、また見栄えはどうかということを意識して、花の苗をプランターに乗せていきました。苗を植えたプランターはとてもきれいで、テラスが一気に明るくなりました。

この3日間で多くの人にかかわることができました。高齢者の方、信徒の方、バスの運転手さんとの交流でたくさんの知らないことを教えていただき、同時に、元気もいただきました。この経験を保育に、介護に活かすことができるよう、日々精進していきたいと思います。



ボランティアに参加をして

30K10 横井 綾乃

今回の新生病院でのボランティアを中心とするリトリートに参加をして、特にホスピス病棟の入院患者の方とのハンドマッサージや演奏会での交流を通して、終末期ケアや緩和ケアに対してこれまで抱いていた暗いイメージがなくなりました。また、自分の運命を受け容れることができた患者さんは、生き生きとしていたのが印象的でした。リトリートに参加するまで、ホスピス病棟の患者さんとのように関わったらよいのか、どのような話をしたらよいのかとても悩んでいたのですが、実際に病棟のホールでみなさんにお会いすると、演奏会やハンドマッサージを行なっているあいだもずっと笑顔を浮かべていらっやって、少し驚きました。すべての人が最終的に自分の病気を受け容れることができないのは仕方ないとは思いますが、客観的に接する事で一人でも多くの方がよりよい人生を送る事ができるのであれば、緩和ケアの存在価値は非常に大きいと感じました。また、演奏会やハンドマッサージを通して、わずかな時間でしたが、多くの患者さんに関わることでその方々の人生の一場面に立ち会うことができたと感じ、この出会いを通して相手の方々がリフレッシュできる時間を提供できたと感じて、嬉しく思うとともに私の人生の中で大きな力になると思いました。

演奏会を行なっているときに、泣いている患者さんがおられて、私ももらい泣きました。その患者さんには、色々な人生があつてきっと辛いことや楽しかったこと、嬉しかったことなど様々な思いがあつたと思います。信州の県の歌である「信濃の国」を歌ったときが一番泣いている方が多く、きっとこの信州にたくさんの思い出があるのだろうと思いました。そして、私も患者さんのように故郷を思い出して泣くことのできる人生にしたいと感じました。

夜、信徒さん方と食事をしたときに様々な思いをうかがいました。もともと信徒ではなかったが、新生病院に入院をしたことで信徒になったという話をうかがって、人生は何が転機になるかわからないと思いました。みんなでご飯を食べたり、歌

を歌ったり笑顔で会話をしたり。大きなテーブルを大勢で囲んで食事をするの楽しさや嬉しさありがたさを身を通して感じることができました。

最終日に行った園芸では、信徒さんと一緒に屋上で花壇の清掃を行いました。一緒に聖歌を歌ったり話をしたりしながら、楽しく活動することができました。きれいになった花壇をみて、患者さん方や勤めている方の笑顔になれたらいいなと思います。

このリトリートに参加して経験したことを忘れず、今後もより一層強く生きたいと思いました。



後記 リトリートに参加して

准教授 山脇 真弓

また今年も長野県小布施町に訪問することができました。

今年も聖公会の皆様にお世話になりながら、3日間のボランティア活動が開始されました。

私は、名古屋柳城短期大学に着任後 2013 年の東日本大震災の復興支援から始まり、6 回参加しています。この間、全ての活動に聖公会の皆様の心のこもった支援が行われており、東北から長野へと引き継がれてきました。

2018 年度の活動は、昨年同様小布施町新生病院で主に行われ、介護福祉専攻と保育科とが各専門にわかれ実施されました。保育科の学生は、病院内の活動と保育園での活動を行い、介護福祉専攻科は、授業の一環として主に緩和ケア病棟での研修・演習が行われられました。保育科の学生たちは、介護現場で高齢者を対象の保育活動をする機会がほとんどありません。そのため、保育科の学生にとっては、今回のボランティア活動は、未知の領域が多く、戸惑いもあったと思いますが、活動を開始すると学生の様子に戸惑いは感じられず、むしろ堂々と利用者さんたちへ対応している場面を観て、学生の対応能力の高さや柔軟性を感じさせられ、さすが、名古屋柳城短期大学の学生だと安堵しました。

介護福祉専攻の学生は、半年間、介護の専門知識を習得し、利用者さんや入院患者さんへの理解や技術を学んでいる学生たちです。活動の様子を見ると、患者さんと向き合う態度や受け止め方、声のかけ方、身のこなしや表情、話の受け答えなど、実習さながらの対応に目を見張るものが多々ありました。

特に、緩和ケア（終末期医療病棟）の患者さんへの対応では、患者さんが抱える個人の課題を聞き出すことなく、相手の心情にゆっくりと入り、心を開かせ、会話につなげていく技術は、その様子を観察していた教師や担当介護士、病棟看護師たちを脅かせるテクニックでした。例えば、自己の現状を受け入れることに戸惑い寡黙状態の老人に、特別な技法を使うことなく、心と心の語り掛けから気持ちを開かせ、話の途中からは笑い合いながら会話をしている患者さんの姿に、病棟看護師や担当介護士がそろって驚きの声を上げていたことは感動的でした。

さらに、余命が宣告され、もう治療の手段がないと訴える患者さんに、寄り添いながら、話を聞き、共感し、互いに手を取り合っで見つめ合う姿には、心にこみあげてくるものを感じました。活動が終わり病棟を去る時、ケア病棟の患者さんたちが笑顔で見送って下さいました。とても死を待つ人間とは感じられないような素晴らしい笑顔での見送りでした。その病棟を後にするときに、ふと一人の学生が、「この次来た時には、あのほとんどの方とは、お会いできないんですよね。」と何気ない表情で一言いった言葉が、私の心に染み「生と死」に直結した現場での実践的な授業でした。大学で座学で学ぶことよりも、この数時間がすべてを教えてくれた価値ある授業だったと思います。

毎年、ボランティア活動が終了するときに思うことは、「つたない活動ではあるが、来年もやろう。」と決意することです。その思いにさせる要因は、参加してこそ得られる体験であり、体感を通して感じるができる特別な感性に訴えるものがあるからです。だからこそボランティアに参加した者が共通する「心の奥に響く温かいもの」は貴重な体験なのです。

毎回、このボランティア活動を企画し実施まで扱ぎつけるための道のりは、大変険しく、厳しいものがあります。しかしながら、学生たちの活動後の感想を見てわかるように、多くの学生が、この聖公会のボランティア活動へ参加後の喜びを語っています。

人と人との関係性の大切さや人と繋がる喜び、自分のつたない行動に喜んでくれた人々の笑顔や感謝の言葉、学生自身が自分自身を見つめ自分の中に変化を見つけることができたなど、参加者全員が終わりに大きな実りを収穫できています。その後の学生の様子は、少し成長したようにも見えます。今年も

22名の学生たちが、ひと回りもふた回りも心身ともに成長することができました。多くの皆様のお力添えによるものだと感謝しています。来年もこの活動が継続されますように、多くの皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

きっと素晴らし出会いがあることを信じて。



発行日 2019年3月16日

編集 名古屋柳城短期大学 キリスト教センター(宗教委委員会)

発行 名古屋柳城短期大学

〒 466-0034

名古屋市昭和区明月町 2-54

TEL 052-841-2635(代)

FAX 052-841-2697